

【主な登場人物】

千尋（18） 全てを点数で判断する優等生。今は地元を離れて一人受験戦争の最前線にいる

美咲（18） 千尋のバンドメンバーでもある一番の仲良し。

満里奈（18） 千尋がバンドメンバーを外れた後、ボーカル。歌がうまい。

トミコ（18） 噂話とオカシが大好きな天然女子。ムードメーカー

夏子（24） 千尋の姉。明るくてうるさくて、実は千尋思い。

（42） 娘達に叱れない不器用な父

ユーヤ お坊ちゃん。千尋と付き合っていたが、のち美咲を付き合い合うようになる

金ちゃん 地元のチンピラ、口が悪いが涙もろい。密かに千尋に思いを寄せる

キムくん その地域に滞在してる交換留学生。金ちゃんのバイト仲間で人一倍優しい。

鮫島女医 千尋の担当医。メガネ美人。患者にも自分にも厳しい鉄の女

シーン1 千尋の家（イメージシーン）

チツ、チツ、チツ、という柱時計の音がゆっくりと聞こえ出す。

天井からぶら下がっている無数のイス。

宙に浮いているその不安定なイスは、舞台中央にスポットで浮かび上がるメガネをかけた女子高生、千尋（18）の不安定な心境も表現しているようだ。

千尋の独白「小さい頃、お母さんに言われた事がある。」

スツと別の場所にスポット。千尋の母が浮かび上がる

千尋の母「千尋、人を点数で判断したらあかんよ」

千尋の独白「だけど、いつの頃からか、私は全ての人に点数をつけるようになった。」

スツとまた別の場所にスポット。

千尋の独白「あくびをしながら巡回してるお巡りさん……45点」

スツと別の場所にスポット。

千尋の独白「路地裏で仕事をサボってるタクシーの運転手-----35点」

スツと別の場所にスポット。

千尋の独白「お年寄りに席を譲らない高校生-----7点。」

スツと別の場所にスポット。

千尋の独白「悪口しか言わないタバコ屋のおばさん-----13点。」

スツと別の場所にスポット。

千尋の独白「人の恋話でしか盛り上がれない女子-----15点。」

スツと別の場所にスポット。

千尋の独白「酔った時にしか怒れない父親-----10点。」

スツと別の場所にスポット。

千尋の独白「うわべだけの関係の家族-----0点」

千尋の独白「こんな風にして曖昧な世の中に点数を付ける。それだけで漠然とした不安が消える。きつとこの世界の中で、自分の立ち位置が確認できるからだ。」

※千尋がそう語る間も、後ろでは点数をつけられる人のスポット

やがて、舞台中央奥の母のスポットに戻る。そこには父と姉の姿も。

千尋の独白「気の優しかった母は、人を採点制で判断しない人だった。だけど、そのせいで人生を誤ったと途中で気づいたんだと思う。だから私は、母のような過ちはしない。家族の前からいつのまにか姿を消した母のような過ちは。」

母が家族のスポットの中から消える。

千尋の独白「もし母が点数で人を判断していたら、私たちの家族は何点に写ったんだろう。」

スツと消える家族のスポット。千尋だけになる

千尋の独白「今の私は、何点もらえるだろう？」

別の音楽！照明は転換照明へ。

と同時に千尋の背景に巨大な黒板が浮かび上がる。

そこにチョークで何か書く千尋。なぞられて浮かび上がる文字。

「ワンハンドレッドライフ」

その文字がやがて数字に変わり、方々へ散る。

数字たちを求めてやってくる少女たち。

(宙に浮いたイスが降りて来る)

登場した同じ制服の女子はみな同じタイミングでメガネを外し、同じタイミングでイスを配置し、そこに座り、鉛筆を持つ。全てが機械のような正確な動き。 どうやらそこは教室のようだ。

(生徒はそれぞれ真上からのスポットライトで映し出される。その中に千尋の姿もある)

シーン2 教室 と、美咲のスポット（田舎）

別の場所。スポットライトの中に、頭の悪そうな女の子、美咲

美咲「（以下、手紙の文章である）拝啓、親愛なる友達へ。って、手紙書く時にはこうやって書くんやってねえ。昨日知ったわ。やっぱなんか手紙って難しい？そもそも漢字わかんへんでさあ。けどチーちゃん、携帯繋がらへんしさ。何度か電話したんやよ。もし番号変わったんやったらこの手紙見た後、番号教えて、ね。あ、そうや昨日さあ、ニュース見とったんやて。ほしたらあれなんやってね、もうすぐ受験シーズンなんやってねえ。それでチーの事思い出してさー。どう、勉強、頑張るとる？東京って星が見えへんのやろ、やでチーちゃんの分まで星にお願いしとくで。どうかチーが志望校合格しますようにって。もし冬休みとか帰ってくるんやったら連絡したって。昔みたいにカラオケ行こうよ、オールで。県庁の近くのカラオケ潰れたんやけどさ、西駅の近くにでっかいカラオケ出来たで、そこ行こ！」

美咲の照明、消える。クロスチェンジで

問題を解いてる生徒達の中の一人、千尋のスポットへ。

千尋の独白「拝啓、地元の元友達へ。いつも偏差値の低い手紙ありがとう。誤解のないように前置きしとくけど、これは脳内返信です。従って、この返信は美咲はおろか地元の誰に届くものではなく、自己完結な独り言だどご理解ください。何かにつけて地元から届く手紙に対し、まったくもって返信をしたことがないけれど、その理由は至ってシンプルで、返信するメリットが見当たらないからです。一分一秒を無駄にしたくないからです。過去の友達と接触する事に意味を感じないからです。地元を離れ、誰の力も借りず、寮生活を始めた頃からそれは変わらない。だからどうか、もう手紙を送らないでください。資源の無駄遣いです。」

SE キーンコーンカーンコーン！

先生「終了ー。後ろから答案用紙集めてー」

スポットは消え、照明切り替わる。

シーン3 学校・放課後の教室

エリート生徒1（文子）「どう、千尋、今回の期末？」

千尋「え〜難しかった〜」

生徒2（数子）「とか言って、千尋絶対いい点取るからなあ」

千尋「いや、ホント今回は難しかったよお。」

文子「ね、最後の答えって、答え、「3a」？」

生徒3（倫子）「あ、私も「3a」」

数子「私も！」

文子「ホント！？良かったあ」

生徒1、2、3は安堵の表情で去っていく。

千尋、スポットになる。みな、ストップモーション

千尋の独白「テストが終わると、みな不安の共有者を探す。自分が少しでも優位に立ちたいからだ。だから私も哀れな脱落者たちに話を合わせてみる。せめて表面的には友達を演じてあげないとき。ちなみにさっきの答えは、「5xマ イナス2」。私はくだらないミスをするクラスメイトを仲間だと思った事はない。入学当初からそれは変わらない」

回想を表す音楽。

と同時に回想とわかる照明の切り替え。

シーン4 回想 同・教室

鬼瓦先生「登場しながら）まずは入学おめでとう。今日から三年間、君たちはこの高校で学ぶ事になるわけだ。この高校に入学できたからには君たちを一流の点取り屋にしてやる。いかに試験で高得点をたたき出すか、それがテーマだ。常に点数に拘れ。トップ校以外は考えるな。それ以下は人間以下だと思え。」

千尋の独白「この都会の進学校に合格し、私は単身でこの全寮制の高校に入った」

鬼瓦先生「一点でも多くもぎ取る執念、それが勝ち残る鍵となる。今春卒業見込みの高校生は、全国で117万7513人。そのうち大学受験するのは、その56万5千人。すなわち全体の何%だ？はい、君（生徒を指名して）」

生徒1「え・えつと」

鬼瓦先生「授業中は一瞬の隙も作るな、はい、君」

生徒2「47、9%です」

鬼瓦先生「正解。すなわち、その47、9%の56万5千人の受験生。その中で1番の点数を取ったものから、ズラアアアアアアアと、56万5千云々番目まで順位が出るわけだ。たった1点、されど56万5千人の中では、その1点の違いが大きく順位を狂わせる。その事を忘れるな。」

千尋の独白「腐った田舎からの脱出。そして一点でも多くい人生を送る事。それが私のテーマだった。」

鬼瓦先生「私の話はこれぐらいにして、新入生の君たちにも少し質問しよう。はい、その君！（「立て」、というジェスチャー）」

生徒3「はい（立ち上がる）」

鬼瓦先生「三年後の君の志望校はどこだ？」

生徒3「東都大です」

鬼瓦先生「去年の東都大の募集人員枠はどれだけか知ってるな？」

生徒3「2497名です」

鬼瓦先生「東都を受けた受験者の数は？」

生徒3「1万3944人です」

鬼瓦先生「つまり倍率は何倍？」

生徒4「5、58倍です」

鬼瓦先生「その5、58倍の倍率を勝ち抜いた2497名のうち、わが高校から合格し

た生徒数は158名。すなわち何%？（別の生徒を指す）」

生徒2「6%です」

鬼瓦先生「6%。全国的に見ると、この6%はトップクラスの数字だが、去年の我が校の卒業生471人、全員東都を受験してる。それで受かったのが、158人、実に何倍だ？」

千尋「2、98倍です。」

鬼瓦先生「そう、合格を手にできるのは、このトップ校の中でも約3分の1。つまりここにいる君たちの3分の2を蹴落とさないと、自分の合格はありえないって事だ。わかるね？」

生徒全員「はい」

鬼瓦先生（千尋に）「ちなみに君は、そんな環境で栄光を掴むだけの執念はあるか？」

千尋「あります」

鬼瓦先生「つまりそれは君の両隣の二人を蹴落とさねばならぬという事だよ」

千尋「もちろん、その覚悟です。」

鬼瓦先生「三年後、その言葉がまた言える事を期待してるよ。」

鬼瓦先生が去り、千尋のスポット。

千尋の独白「自分がのし上がるには、誰かを蹴落とすしかない。それが私のいる環境。優れた人間がいい点数を取るわけじゃない。いい点数を取る人間が優れた人間なのだ。曖昧な世の中より、この場所はシンプルだった。」

キーンコーンコーン（SE）

回想の照明、終わり。元の席順に。

シーン5 教室・六限目。

鬼瓦先生「はい、じゃ六時間目の授業終わります。あ、こないだのテストの結果をかせすぞ。えー、青木」

五十音順に名前が読み上げられ、生徒達、ひとりづつ先生の所へ順番に渡された答案用紙を見て、一喜一憂する生徒。

千尋「このテストの点数は、試験前の最後の審判。閻魔が下す判決のように生徒達の明暗が大きく分かれる」

鬼瓦先生「坂上千尋」

千尋「はい」

先生の元へ向かい、答案用紙を受け取る。

千尋「見る前から点数はわかる。答え合わせ済みの答案用紙をただ受け取るだけ（と言いながら点数を見ると）……え？……」

結果を見て、硬直する千尋。世界が止まる。

千尋「……何でこんな点数なの……」

慌てて、答案用紙と問題用紙を比べる。

千尋「……ひとつずつ、ずれてる！……うわー、致命的なケアレスミス……試験前の最後の期末なのに……あああ……落ち着け、落ち着け、私。」

頭を抱える千尋。

声「千尋！」

慌てて、テスト用紙を後ろに隠し、振り返る。

そこにいたのは、同じクラスの風間英子。

英子「どうだった、結果？」

千尋「(動揺を隠し) まあまあ」

英子「まあまあって言って、こないだ負けたからなあ。ちよつと見せてよ」

千尋「ダメだって」

英子「何だよ、勝負しよって言ったでしょ。」

千尋「英子の勝ちでいいよ(去る)」

英子「(追いかけている) いいから見せてよ。わかんないでしょ！」

英子、無視して去ろうとする千尋から強引にテスト用紙を奪おうとする。

千尋「あ！ちよつと！」

追いかける千尋。

千尋「返してよ！」

英子、笑いながら逃げ回る。必死で追いかける千尋。

やがて校舎内から外へ。(※舞台の外。客席まで追いかけて) (移り変わって行く場所は、人々の動きと映像で構成) 舞台上、再び戻って来る二人。

英子、先にバててこれ以上走れない様子。

千尋「はあ、はあ、返してよ」

追いつめられた英子、点数をみようとする。

と、その瞬間、英子に飛びかかる千尋。とっくみあい。やがて

英子「ああ！(突き飛ばされ、倒れ込む)」

テスト用紙を奪う千尋、英子から離れ、前の方へ。

千尋「はあ、はあ(さすがに千尋も疲れた様子)」

息を切らす千尋、奪い返したクシャクシャのテスト用紙を見てホッと肩をなでおろす。

車の激しいクラクション！

英子「(倒れ込んだまま) 千尋! 車!」
千尋「え?」

英子が見た方向を見る千尋。

大きな二つのヘッドライトが千尋を包みんでいく。

暗転!

キイイイイイイイイイ!

暗闇の中、どこかに車がぶつかる音。

やがて救急車の音。

ゆっくりと照明、ついてくる。

(暗転中、いくつかのベッドを用意)

人々の往来。ナースの姿も。(病院のガヤのSE)

シーン6 病院・待合室

舞台前。左右をいつたりきたり落ち着きのない千尋の姉、夏子
そこにやってくる慌ただしい看護師、大坪。

大坪看護師「すいません! 坂上千尋さんの、えっと、お母様?」

夏子「姉ですけど」

大坪看護師「あ、お姉さん! ええかね、ちよつと落ち着いて聞いてもらってええか

ね!?!」

夏子「落ち着かんと聞けへん状態なんですか?」

大坪看護師「電話で伝えたと思うけどね、妹さん車に撥ねられてまってねえ」

夏子「命は!?! 命は無事やったんですか!?!」

大坪看護師「命に別状あらへんけど、ただ」

夏子「ただ!?!」

大坪看護師「衝突の際、10メートルもはねとばされてまってねえ」

夏子「10メートルも!?! (パニック状態に)」

大坪看護師「ほんで頭部をでれえ強う打つとるんやわ。詳しくは、CTで調べなあかん

と思うけど」

夏子「CT!?! CTって!」

大坪看護師「とにかく最善は尽くすで! 待つとってもらえってええかね!」

夏子「CT!?! CTって何なんですか!?!」

大坪看護師「ご両親来たら、とりあえずそういう事やって伝えたって! ね!」

慌ただしく戻っていく大坪看護師

夏子「10メートル・・・はね・・・飛ばされた(頭を抱える)」

欽次「千尋ー！」

パタパタとスリッパをならし走ってくるヤンキー風な男・欽次

夏子「おちおちおち落ち着きやーって、あんた！」

欽次「お姉さんの方が落ち着かなあかんでしょ！どうしたんですか！？」

夏子「ちちひろがハネ、ハネ、ハネ！」

欽次「ちひろがハネ？ハネがどうしたんですか！」

夏子「ハネで！ハネで飛ばされたって！」

欽次「ハネで！？誰のハネで飛ばされたんですか！？」

夏子「えっと・・・ET！」

欽次「ET？ETってハネ生えてましたっけ！？」

夏子「しかも、10メートル！」

欽次「10メートル！？10メートルのハネ生えとるんですか！？」

姉は伝え終わるとグツタリして気を失う

欽次「お姉さま！しっかり！」

声「千尋ー！」

バタバタと慌てて登場する千尋の父、五郎

欽次「お父さま！」

五郎「何がお父様や。なんで近所のチンピラがここにおるんやて！」

欽次「それよりお父様！落ち着いて聞いたってくださいよ、実は千尋さんが！」

五郎「そうや、千尋！千尋は無事なんか！？」

欽次「ハネで飛んだって！」

五郎「ハネで飛んだ？千尋が！？」

欽次「しかも10メートル！」

五郎「10メートル！？何が！」

欽次「顔！」

五郎「顔が10メートル！？顔が10メートルでハネまで生えてまったんか！？一体誰がそんな事したんや！？」

欽次「ET！」

五郎「ET!?千尋は、ETの仕業で、ほんで顔が10メートルになってハネまで生えてまったんか」

欽次「そういう事なんやって!」

五郎「どーいう事なんや!? (頭が混乱する)」

と、そこへ鮫島女医が登場。

五郎たち「先生!」

家族が女医に駆け寄る。

五郎「うちの娘が!うちの娘がETのせいで顔が10メートルになって、おまけに10

メートルのハネが生えて、どこかへ飛んでたって、本当かね!？」

鮫島女医「は!？」

夏子「先生、あの!大事な受験が控えとるで何とかしてもらえんかね!!」

鮫島女医「今、とりあえず一番奥の大部屋に移してもらったで。窓際のベッドにー」

欽次「おっしゃあ、待つとれよ、千尋!」

と先頭きつていこうとする欽次。

五郎「だから何でお前が先なんやて!」

などと欽次を捕まえ、投げ飛ばす五郎、われ先にと ダッシュ。

鮫島「あ、方向、あっちですけど」

欽次「おっしゃああああ!」

鮫島の指差す方向へ走り出す欽次。

五郎「(追いかけて) 待て、こらああ!」

鮫島女医「ここは病院です!走らない!」

鮫島女医も退場

シーン7 同・大部屋

照明がゆっくりつき始めた場所には、ベッドがずらり並んでいる。そのい

くつかあるベッドのひとつに千尋が眠ってる。近くにいる看護師は、大坪
(年齢不詳)

千尋「(目を覚まし)・・・あ・・・あれ・・・」

大坪看護師「あ、気づいた？随分、長い事寝とったねえ。気分はどう？」

千尋「・・・ここは・・・」

大坪看護師「覚えとらへん、ここに運ばれたの？ここはねえー」

遠くからの声(五郎と欽次)「ちひおおおお！？」

廊下からの大声に反応する同室の患者と大坪看護師。

駆け込んで来る欽次。ハアハアと息を切らし

大坪看護師「あ、千尋ちゃんの、えっとー」

欽次「ボーイフレンドです！」

五郎「父です！(と欽次を突き飛ばし、一足遅れて到着。ふと千尋に気づき)あ、千尋！

わかるか？千尋！」

夏子も遅れて駆けつける。

欽次「千尋、ほら、俺やで！欽ちゃんや！お前のスカートよう捲ってた欽ちゃんやで！」

大坪看護師「ちよつとあんまり至近距離で」

五郎「近づくな、チンピラ！刺激を与えたらあかんって」

千尋「(ようやく目の前に家族いる事に気づき)な、なんでみんないるの？・・・ここ何

処・・・」

五郎「病院やわ、地元の病院。東京からこっちに搬送してもらったんやわ」

千尋「(だんだん意識がはつきりし)え、ここ東京じゃないの？学校は！？塾は！？ど

うして!？」

五郎「どうしてって、東京の病院やと見舞いも行きづらいやろ

千尋「待つて待つて、え、今度、塾の模試テストが控えてるんだけど・・・」

五郎「(ここらここら、動いたあかんて。その体で無理したら」

千尋「直前ゼミも受けなきゃ！こんなところにいる場合じゃ(ベッドから起き上がろうと
して落ちる)いたあ！」

看護師たち、千尋を落ち着かせる。

大坪看護師「千尋ちゃん、落ち着かな！(と皆と協力し、うつ伏せのままの千尋を起こ

す」

欽次「そうやで、千尋」

千尋「痛い痛い痛い！離して！」

五郎「何処触つとるんや、不良！！お前は刑務所戻れ！」

欽次「刑務所なんか入った事ないっすよ！」

夏子「(五郎たちに) やかましくて！千尋は病人なんやよ」

欽次「そうや、千尋！10メートルのハネで飛ばされたんやろ？」

千尋「ちよつと触らないでよ！」

五郎「そうや、触んな、チンパンジー！はよジャングル帰れって！」

欽次「ジャングルって何すか！？」

千尋「もう出てっつてよ！」

五郎「そうや、出てけ、不良！」

千尋「お父さんも出てっつて！みんな出てっつて！出てっつて！」

千尋が叫ぶと、気を失いかける。心配する全員。

大坪看護師、興奮気味の家族を千尋と引き離し、

五郎「(看護師に)・・・すいません、「出てっつてちゃん」をよろしくお願いします。」

大坪看護師「ま、今何言ってもあれやろうで。とりあえず診察室二番へ巡ってもらって

ええかね。鮫島先生に話聞いた方がええと思うで」

五郎たち、一礼して去っていく。

大坪看護師「(千尋のところへ) ほら、一人きりになれたで。体調大丈夫？」

千尋、答えない。

大坪看護師「(窓の向こうを見て) 久しぶりの景色でも見たら。ほら、開放的やろ、田

んぼしかないでね、東京やとガチャガチャしとるもんねえ。」

千尋「・・・」

照明、切り替る

シーン8 診察室(※部分的エリア)

レントゲン写真を眺めているしかめ面の女医。

鮫島女医「(険しい表情) うーむむむむむ」

不安げな表情で顔を見合わせてる五郎と夏子と欽次。

五郎「(恐る恐る) で、あのう・・・娘の様態はー」

欽次「はっきり言ってください！この際はっきり言ってもらった方が」

五郎「だから何でお前がー」

と、また揉める五郎と欽次。それを止める夏子

鮫島女医「静かに！」

五郎・夏子・欽次「(ビクっとして) はい、すいません！」

鮫島女医「私、包み隠せん性格やで、言われなくとも、はっきり言わせてもらいますけどねー」

五郎「あ、ちよつと待ってもらえるかね！一回深呼吸してから」

三人、せーの、で深呼吸ひとつ。

五郎「は、はい、お、おねまいます！」

鮫島女医「はっきり言ってー」

五郎と欽次、夏子、ゴクリと生唾を飲む。

鮫島女医「順調です！」

三人、こけそうになる

欽次「ビックリしたあ、どっかに異常あるかと思ったやないですか」

鮫島女医「脳波も正常やし、おそらく後遺症も心配ないと思います。」

五郎「あ、足の骨折の方は・・・」

鮫島女医「まあ、10メートル飛ばされてこの程度なら奇跡やろうね。そう長くはかか

らんと思いますが」

欽次「ありがとうございます！」

欽次と姉、手をとりあつて喜ぶ。

五郎「だから何や、この手は！(と欽次をはじめ飛ばす)」

医者と父たちがいた場所の照明が消える。

(千尋たちのいたエリアの照明に戻る)

シーン9 病室・大部屋

並ぶベッド群。

大坪看護師「はい、食事の時間やよー(と食事を運んでくる)」

布団の中の千尋は、警戒した様子で顔を出す

大坪看護師「なにい、そんな警戒せんでもええよ。あ、そうや、ちゃんと挨拶しとらへんかったね、私、担当の大坪ね。ま、職場のみんなからオツボネって言われとるんやけどね、ほら、オツボネやからね。ま、結婚もしてへんからそういう意味じゃ確かにオツボネなんやけど」

などとどーでもいい話を大坪がしている間に、千尋は、布団から顔を出し、ゆっくりとメガネをかける。

すると・・・

SE すーっと何かが浮き出るような音

と同時に視野が暗くなり、人々の頭上に数字が浮かび上がる

千尋「え？」

慌ててメガネを取る(照明、元に戻る)

目をこする千尋、

千尋「あれ？・・・何今の？・・・気のせいかな？」

恐る恐るもう一度メガネをかけてみる

SE すーっと何かが浮き出るような音

と、同時に、その病室にいる人々の上に数字が浮かび上がる

千尋「え、何これ!？」

咄嗟にメガネを外す千尋。メガネを色んな角度から観察。

大坪看護師「何、なんかついとる?(頭を触る)」

千尋「いや、何でも！」

もう一度、メガネをかけると、

SE すーっと何かが浮き出るような音

と同時に視野が暗くなり、人々の頭上に数字が浮かび上がる

大坪看護師「え、白髪!？」

千尋「違います」

大坪看護師「違わない!白髪なの!ねえ、とって!抜いて!ほかって!」

千尋「だから違いますって!」

慌てふためく大坪看護師、退場。

逆側から、ひよっこり顔を出してる女子二人。

旧友、満里奈とトミコ。(満里奈はギターケース持参。)

満里奈・トミコ「(恐る恐る)ち・ひ・ろ」

同じ病室に寝ているおばあさんが満里奈達の声に反応する。

満里奈「千尋!?(駆けつけて)あー、しばらく逢わへんうちに、こんな姿に!」

トミコ「肌カツサカサで!」

満里奈「手足シワツシワで!」

二人「(半泣きで)ああ、やっぱりETになってまったんやああ」

二人、おばあちゃんの患者の前に泣き崩れる。

大坪看護師「あの、ちょっと!」

トミコと満里奈、びくっとして静かになる。

大坪看護師「千尋ちゃんはこっち。」

満里奈・トミコ「え!？」

振り向く二人、そこには千尋。勘違いに気づく。

満里奈・トミコ「千尋！」

満里奈「なにい、千尋、千尋のまんまやん！？（手を握る）」

トミコ「肌ピッチピチャし！（ほっぺに触れる）」

満里奈「髪つやつつややし！」

トミコ「良かったあ、昔のままや、千尋やあ」

満里奈「ビックリしたてえ、10メートルのハネのETになったって聞いたで。」

千尋「どんな噂なのよ、それ。」

満里奈「どんな噂って。どんな噂やろね、いや、そんな時は気が動転しとってさ」

トミコ「ほんと早とちりなんやで、満里奈は。」

満里奈「トミコも信じとったやろ！」

満里奈とトミコ、二人でじゃれあう。

トミコ「困った事あったら何でも言って。うちら勉強以外だったら何でもするよ」

千尋「勉強がしたいんだけど」

トミコ「あ、そうや！千尋、受験近いんや！」

満里奈「そうや、そうや、ゆっくり休養しとる暇ないやん！何、事故ととるの！」

千尋「私だって好きで事故った訳じゃないから」

トミコ「そりやそうやよねえ、変な噂まで流されてねえ」

満里奈「あれ、美咲まだ来とらへん？」

トミコ「あ、そうや、美咲、美咲！」

千尋「美咲！？」

トミコ「何、変な声出して。そら来るやろ、うちら四人でうちらやで。」

満里奈「千尋がこっちの病院に運ばれたって聞いて、一番心配しとったの、美咲やもん。」

トミコ「(周り見て)迷ととるんやない、美咲。昔っからいっつもそうやろ。ね」

千尋「・・・」

トミコ「なにい、千尋。そんな顔して。具合悪いの？」

千尋「あ、いや、別に・・・」

声(美咲)「ちiiiiiiiiiiiiいやああああああああん！」

千尋、ドキっとする。

トミコ「あ、美咲の声や！」

声(鮫島女医)「廊下は走らない！」

声(美咲)「ごめんなさーい！」

息を切らしながら登場する美咲。

千尋、ドキッとす。急に挙動不審になる

美咲「・・・はあ、はあ・・・(窓際のベッドへ近づき) あー、ちー、こんな肌かっさかさ
で、手足シツワシワになって・・・(と嘆く)」

満里奈「美咲!？」

美咲「(振り返る) え?」

満里奈「こっちこっち」

美咲「あー、ちーちゃん! (と逆の窓際へ走り出す) ビックリしたあ、だってチーが1
0メートルのー」

トミコ「もうそれはええて!ほんと美咲は、おっちょこちよこちよいなんやでえ」

美咲「ちよこ一つ多いって!」

満里奈「千尋、美咲やよ。全然変わつとらへんやろう。」

千尋「あ・・・うん」

美咲「困つとる事あつたら何でも言つて。勉強以外やったら何でも手伝うでさ」

千尋「あ・・・うん」

間

満里奈・トミコ「え、そんなけ!？」

満里奈「そこ、つっこまへんの?勉強がしたいんやけどつて。さっき言い返したやん」

トミコ「私も今突つ込む準備しとつたのに」

千尋「あ・・・うん、そうだね・・・」

満里奈「なにい、何か随分他人行儀な?」

千尋「え、別に普通だよ」

トミコ「あ!もしかして!」

千尋「何、もしかしてつて」

トミコ「あ、いや、何でも無い何でも無い。」

満里奈「なにい、言やあええがね。え、私に秘密ごと?」

などとじゃれ合うトミコと満里奈。

そこに鮫島女医、登場。

鮫島女医「あれ、あんたら、何しとるの!面会時間はとっくに終わつとるて!」

トミコ「あ、もう少しだけ」

鮫島女医「ダメやて、規則やで!患者さんも休養せなあかんの。ほら、帰った帰った。」

軽く千尋に挨拶して、そそくさと帰る美咲たち。

鮫島女医「大丈夫？」

千尋「・・・あ、はい」

照明、切り替る。

シーン10 廊下（部分的照明）

逃げて来る満里奈とトミコ

満里奈「はあり、こわ。何あの人、あんな怒らんでもええのに。うちら別に悪い事しと

らんと思わへん？」

トミコ「ま、ええがね。何はともあれ、千尋が無事やったわけやし」

満里奈「まあね」

トミコ「10メートルの顔やなかったし」

満里奈「まあね。けど、あれやったよね、なんか変やなかった？」

トミコ「顔？」

満里奈「顔やなくて、美咲と千尋」

トミコ「え、態度つてこと？」

満里奈「いや、久しぶりなのはわかるけどさ、なんか他人行儀やなかった？」

トミコ「やっぱ満里奈もそう思ったんやあ。」

満里奈「そら思うやろ。だつて千尋と美咲つて超仲良しつてイメージやし。美咲が文化

祭でバンドやろうつて言った時も、真っ先にオツケーしたの千尋やったし。そ

ういうイメージあるでさ・・・」

トミコ「満里奈！」

満里奈「なにい、大きい声出さんといてよ」

トミコ「(手招きして)これ、絶対誰にも言ったらあかんよ」

満里奈「え！？トミコ、何か知つとるの？」

トミコ「いや、これ聞いた噂やからホントかどうかわからへんけど」

満里奈「わ、なんかドキドキする、そーゆーの」

トミコ「ユーヤくんつて覚えとる？」

満里奈「ユーヤ？・・・ユーヤつて、千尋の彼氏の！？」

別の場所に照明。ユーヤが登場（回想）

トミコ「これホント、内緒だよ！絶対言ったらあかんよ」

満里奈「だからわかつとるて」

トミコ「あのね、実はこれ、欽ちゃんに絶対しゃべるなって言われたんだけどね。」

満里奈「全然しゃべつとるけどね」

トミコ「ユーヤって、うちのの中じゃ千尋の彼氏やと思つとつたやろ」

満里奈「え、なにに、違うの？」

トミコ「いや、違わへんけど。実は、欽ちゃんが見てまったんやと」

と、しゃべってる間に、別の場所（回想）に登場する美咲。美咲が、待ってるユーヤと手をつなぐ。

満里奈「何をう？」

トミコ「美咲とユーヤ、一緒におるとこ」

満里奈「ほう、ほんで」

トミコ「ほんなけ」

満里奈「ふつーやん！」

トミコ「ふつーやなくて！手ー、つないどつたんやて！」

満里奈「え、うそ！ちよつと！そこ先に言やーよ！」

トミコ「満里奈、声おーきいて！」

満里奈「トミコの方が大きいて！え、いつ、それ！」

トミコ「千尋が東京行つてすぐ」

満里奈「ほんなら卒業した後！？なにに？略奪愛！？ほんならそれ知つてまったの、千尋！？」

トミコ「まあ、あの他人行儀っぷりはおそらくそこから来たんやないかと」

※回想シーンの美咲とユーヤも照明消えた時、同時に退場。

満里奈「うわー、そうやったんやー、全然知らへんかったー」

トミコ「誰にも言わんとしてよ！私、誰にもしゃべつとらへんでね！！」

満里奈「思い切りしゃべつとるけどね」

トミコ「しゃべつとらへんで！私、五人にしかしゃべつとらへんで！」

満里奈「それ、けつこうしゃべつとるて！」

トミコと満里奈、その後もしゃべりながら退場。

照明カットチェンジで、千尋のベッドにスポット。

千尋の独白「次の朝、目を覚ますと、全てが夢だった……なんて都合よく世界は回っていない。」

布団からひよこつと出るギブスの足。

千尋の独白「今日もまた囲むのは白い壁。その日以降、色んな検査を受けさせられた。」

千尋の背景に浮かび上がる視力検査の表示や、
CTで撮影した脳内の様子。足のレントゲン等。

千尋の独白「レントゲンや、CTスキャンや、その他、脳波の異常をなんやらかんやらするものやら、目の視力をどうのこうのするもの。私は、NASAに捕獲された宇宙人のごとくあれこれ調べられた。結果、骨折は一ヶ月ほどで完治。それ以外特に異常はないと言われた。だけど……」

メガネをかける千尋。SE スウー
同室の患者の頭上に、点数が浮かび上がっている。

千尋「例の数字が未だに消えない。あらゆる検査にもひっつかからない原因不明の症状……だからと言って、昨日ほどの気味悪さはなかった。メガネを外せばその数字は見えないし、とりわけ大きな障害はなかった。」

声（欽次）「ち、ひ、ろ！」

その声で千尋のスポット解除。病室の照明。
そこには、欽次。頭上には、「10」の数字

欽次「あ、これ、あのう、差し入れ。占部んとこの柿。昔、好きやったろ。な」
千尋「（欽次の頭の上の数字を見て）……10？……（メガネをはずす）」
欽次「10？ああ、まだ10時前やからな。朝早すぎた？はは。まあ、なんていうか、その方がちゃんと話も出来るかと思って」
キム「欽次さん、どのタイミングで入るが大丈夫ですか……」

と顔を出すキム。頭上には、15の数字。

欽次「つと！ちよつとまだまだ。早いってキムさん。もう少し二人っきりの時間があつてから」

千尋「(制して)あのさ、ちよつといいかな」

欽次「ああ、ごめんごめん、この人な、俺と同じプレス工場で働いとつてさ、日本に留学に来とるんやわ。な、キムさん」

キム「はじめまして、キムです」

キムは、手に包帯。頭の上の数字は、15

千尋「(頭上の数字を見て)・・・15・・・」

欽次「あ、この包帯な、工場のプレス機で挟んでまって、ほんで今整形外科に通院中なんやわ。」

キム「はい。手が、とても痛いです」

千尋「千尋、あのな、キムくんはこう見えてでれえ勉強熱心なんやわ。で、お前も頭ええやろ。キムさん、わからへん問題とかあるらしいで、ちよつと見たつて欲しいんやわ。な」

キム「千尋さん、頭よくて優しい、聞きました。一緒に勉強したいです、」

欽次「ほら、一緒にしたいんやと」

千尋「あんたが言うのと、イヤらしい意味に聞こえるけど」

欽次「やらしないわ、アホ！な、ええやろ、千尋。人に教えるのも、勉強になつたりするやろうし、な」

千尋、欽次を睨む。

欽次「あ、何やその蔑んだ目！別にお前の邪魔しにきたわけやないからな」

キム「欽次さん、すごくいい人です」

欽次「ほら、聞いた、今の台詞！」

千尋「そう言えつてこの男に言われたんでしょ」

キム「はい」

欽次「はい、つて・・・あんなけ言ったのに、キムさんんん」

千尋「(めんどくさくなつて)勉強教えたらすぐ帰るんだよね。」

欽次「当たり前やろ。すぐ帰るわ。俺だつて忙しいんやわ。」

千尋「貸して。」

欽次「ええつて。キムさん、良かったな！」

千尋、キムから問題集を奪い取り、開く。すると・・・

スーッとというSE。浮かび上がる「0」という数字。

千尋「・・・え?・・・」

メガネを外し、目をこする

欽次「どうした?」

千尋、またメガネをかける。

千尋「赤い数字、浮かんでたりする?」

キム「え、どこにですか?」

千尋「ページの右上」

欽次「・・・見える、キムさん?」

キム「見えるはないです」

欽次「俺も見えーへんぞ」

ふと何か思いつく千尋、問題集に答えを書き込

む

欽次「聞いとるんか?人に話ふつといて」

スーッと「0」という数字から「5」という数字に

変わる

千尋「あ、変わった!?!」

欽次「変わった?そう!わかるか、髪型変えたんや(と照れる)」

千尋「(無視して)「0」が「5」に。本当に見えない?」

欽次「あのなあ、さつきから全然言つとる意味わからんわ。もう少しわかりやすく説明してもらってもええかな?」

また千尋は、何かを試すように素早く問題集に答えを書き込む

欽次「人の話、聞こうぜ!」

スーッとまた何かの変化音。(SE)

千尋「10になった！10になったよね？そうか、やっとわかった、この数字・・点数
なんだ・・私、点数が見えるようになってる・・」

欽次「？点数？」
声「ちひろー！」

ドヤドヤと入って来る三人に押しつけられる欽次。

一気に騒がしくなる病室。その三人にも数字が浮かんでいる。みな低い数字。

千尋「2、4、5、みんな一桁の点数・・」

トミコ「ちよっと。何で欽次、ここにおるの、あんた邪魔やて。空気汚れるで」

満里奈「そうやて、大気汚染やて」

トミコ「ほらあ、しっしっ」

欽次「そんなケチョンケチョンな・・」

キム「欽次さん、ケチョンケツチョンって何ですか？」

欽次「おい、お前ら、千尋、受験生やぞ。邪魔しにくんなよ、こっちはお勉強会しとる

んやぞ」

トミコ「受験勉強から一番遠い存在のあんたが何言っとんの！」

美咲「ま、ええて。そんな嘘は。うちら、千尋に用あるんやて。あんた、出てってよ」

欽次「ポロッカスやな」

キム「欽次さん、ポロッカスって何ですか？」

欽次「調べえよ、自分で。(美咲たちに)あんな、こっちは大事な事千尋に聞いとるの！」

美咲「こっちだって大事な事聞ききたんやわ」

欽次「千尋は忙しいんやて。な、千尋。こんな奴らと勉強以外の事やるつもりないもん

なあ」

千尋「(しっしっ)ま、少しなら」

美咲「ほらあ」

欽次、呆れる。チラシを見せる美咲。

美咲「ほら、このチラシ見て。これ、ラジオ番組とカラオケの会社がなんか主催しとる

全国規模のオーディションなんやわ。あ、言ったっけ？うちらバンド再結成して

さあ。ほんで今、これの予選にエントリーされたんやわ」

満里奈「地方大会勝ち抜いたら、どこ行けると思う！東京やよ、東京！」

トミコ「しかも優勝したらその後、東京での活動をサポートしてもらえるんやと！すこ

いいやろ！」

美咲「やで、うちら超気合い入ってき。今回のためのサポートスタッフ、ネットとかで募集かけたんやわ、そしたら結構応募があつてさ。ほら、見て、これ履歴書なんやけど、この人が一番目、二番目、三番目・・・」

などと美咲の話中、舞台後ろに浮かび上がる履歴書の中の応募者。(スポットの中、ずらり横一列に並ぶ。)

美咲「ま、あんまり人数多いのもあれやで、誰か一人に絞ろうと思うんやけど、誰がええかなあつて」

欽次「千尋に関係ないやろ」

トミコ「関係大有りやて、千尋もメンバーやもん。意見だつて聞きたいわ」

千尋「一番高い点数の人を選んで」右から3番目。」

欽次「おい、千尋もそんな即答な」

美咲「え、右から三番目!?ほんと!?本当にそう思う」

三人、興奮したり驚いたり。

満里奈「実はうちらん中じゃ、あの子一番ええんやないって話とつたんやて。」

美咲「すごい、なんか以心伝心やわ」

欽次「俺は、このミニスカートの子がええと思うんやけど」

と、一番可愛らしい子の履歴書を指差す

トミコ「それ、あんたのやらしい基準やろ」

欽次「だから、やらないって!」

千尋「この子はダメ、13点」

満里奈「え、何13点って?」

欽次「何でダメって決めつけるんや、しゃべったこともないやろ。この子の何を知ってるんや」

トミコ「(欽次に) あんたこそ何を知っとんの!」

千尋「とにかく選ぶなら右から三番目。」

美咲「千尋も言うんやから間違いないわ。これで全員一致や」

欽次「俺、一致しとらんけど」

美咲「あー、なんかスッキリした!ようし、この子に決定!(と一枚の履歴書を掲げる)」

欽次「あ、そうや!キムくん、全然勉強教えてもらつとらへんやん?」

キム「はい、まだです。でも迷惑するならー」

トミコ「もう面会時間終わりやで、また今度また今度」

欽次「アホか、俺ら先に来たんやぞ、しかも勉強を」

トミコ「勉強なんてこじつけやろ、あんた、千尋に逢いたいだけやん」

欽次「バ、バカ言うな、誰がそんな事」

トミコ「だってあんた、昔、千尋の誕生日にさあ、うちのお寺の柿の木登って」

欽次、トミコの口を塞ごうとする。大騒ぎ

スポットに切り替る千尋。

他の人物は一斉にストップモーション。↓やがて退場。

千尋の独白「今日もまた私のテリトリーに色々な邪魔が入った。だけどひとつだけわか

った。私が見ている数字は点数だったのだ。生身の人だけじゃなく、履歴

書や問題集からも点数が見えるようになっていた。」

スポット解除。

シーン12 病室

ベッドの上の千尋。鮫島女医と大坪看護師。

鮫島、大坪の頭上にはそれぞれ「55」「38」という数。

鮫島女医「・・・で、折り入って相談っていうのは？」

千尋「退院したいんですけど」

鮫島女医「ご両親がそう言っとったの？」

千尋「いや、そういうわけじゃ」

鮫島女医「ほんなら無理やわ」

千尋「東京の病院に移りたいんです」

鮫島女医「だから無理やて」

千尋「どうしてですか？」

鮫島女医「無理に決まっとるがね、そんな体で。」

大坪看護師「何か問題あるなら聞くけど」

千尋「すべてが不満です。」

鮫島女医「何処が不満なの。毎日にぎやかなお友達も来てくれるし。」

千尋「それが迷惑です」

大坪看護師「お見舞いに来てもらえへん患者さんだっておるんやよ。」

鮫島女医「そうやて。オツボネさんみたいな年齢になつてみい。だーれも相手してくれ

ーへんよ」

千尋「じゃせめて個室に」

鮫島女医「だから無理やて」

千尋「どうして！」

鮫島女医「個室は満室やし。」

千尋「こっちは受験生なんですけど！」

鮫島女医「こっちは医者なんやけど！」

大坪看護師「まあまあ、あんまり目くじら立てたら！」

千尋「立てたら何ですか？」

大坪看護師「私みたいにシワツシワになるよ（怖い顔）」

鮫島女医「とにかく、誰か特定の人だけ特別扱い出来へんて。」

千尋「どうしてですか！」

鮫島女医「それが規則やで」

鮫島女医、去る。

大坪看護師、宥めるが、布団に潜り込む千尋。

お見舞いを持った父、五郎が登場

五郎「おう、受験生。勉強は、はかどちちよるか？」

千尋「（イラっとしつつ）おかげさまで」

無視して、勉強してる千尋

五郎「あ、えっと・・・これ、お見舞い。岡島のエクレア」

千尋の足下にエクレアのハコを置く

五郎「賞味期限切れとるけど」

そう聞いた瞬間、ポイツと投げ捨てる千尋

五郎「ほかるな、アホウ！！」

慌てて拾い、三秒ルールで自分で食べる

千尋「受験生に変なもの食べさせないでよ！」

五郎「まだ食えるて。（ガツガツ食いながら）ほら、全然いけるて！」

千尋「何なの？何の用？勉強したいんだけど」

五郎「あ、はは。悪いな、いや、あのな、今朝お前の塾電話したんやわ。次、塾の模試あるんやろ。怪我の事も知らなかったみたいやし。ほんで今ちよつと動けへんって状況話してさ」

千尋「動けるけど」

五郎「ほんやでこつちで模試テスト受けさせてくれーへんやろかって相談したんやわ」

千尋「そんな事しないでいいから、私を東京戻してよ。こんなところで勉強とか無理だし、ほんと」

五郎「それがベストやろうけど、現実問題、向こうでその体やと生活きついやろ、トイレだって足まげれーへんぞ。こんな直立不動で」

千尋「いいから」

五郎「いや、私が向こうで付き添うのもしんどいし。寝る時とか添い寝になるし。お前の寮の六畳一間に」

千尋「だから一人で大丈夫だってば！」

五郎「あ、そしたら、学校のクラスメイトとかで誰か助けてくれる子おらんの？とにかく世話してくれる子、そういう子おらんやったら少しはあれかもしれんけど」

千尋「学校の友達は無理。試験直前だし」

五郎「あ、そうや！いつも点数競い合つとるライバルおるとか言つとったやろ、その子に頼めーへんのかね？」

千尋「だから無理だって」

五郎「無理やないやろ、だってクラスメイトなんやろ？ましてやずっと競いあつとったライバルなんやったら絶対寂しがつとるやろうし。もしあれやったら私から聞いたつてもええけど」

千尋「いいよ！」

ビクつとする父

千尋「・・・私が聞くから」

五郎「ほんなら聞いてみ。それでいけそうなら教えてくれりやあええで。・・・ま、とりあえず模擬テストの件は一応こつちでも調整しとくで。な」

五郎、去っていく。

千尋「・・・」

ゆっくりと照明、チェンジ。

松葉杖をつく千尋、移動し始める。

シーン13 病院・廊下

SE ピポパポピ。などと公衆電話のプッシュ音。
千尋、一つの場所で止まるとスポットへ。
受話器を持っているマイムプルルル、プルル。
という音と同時に、別の場所にもうひとつのスポット。そのスポットには、ライバル、英子。

英子「はい、もしもし」

千尋「あ・・もしもし英子、えっと、千尋だけど・・元気？」

英子「え、千尋！？大丈夫？」

千尋「え、ああ、まあ、大丈夫だけど」

英子「ビックリしたよ、思い切り撥ねられたからさ。死んだかと思ったよ。え、今地元戻ったんでしょ？」

千尋「え、何で知ってるの？」

英子「聞いた聞いた、先生。けど怪我とか大丈夫なんでしょ？良かったじゃん」

千尋「え・・うん、まあ」

英子「あ、そういや、順位表出てたよ。誰かから聞いた？」

千尋「あ、順位とかはどうでもいいんだけどさ」

英子「え、何順位より大事な事？」

千尋「えっと・・まあ、大事ってほどじゃないかもしれないけど」

英子「ごめん。大事じゃなかったら今度でいい？今から塾の直前講習だから」

千尋「あ・・そうだよね」

英子「じゃあね。(と電話を切る)」

プープープー。英子の照明(スポット)から、その場所全体明かりに。そこは、また碁盤の目のように画一化された机の群。
(※千尋の場所は、依然スポットのまま)

英子に近寄ってくるクラスメイト。

文子「何、英子？誰から電話？」

英子「千尋」

文子「千尋？超なつかしいー」

倫子「懐かしいって、こないだまで一緒にいたじゃん」

文子「え、でも田舎にひっこんだんでしょ？」

数子「ひっこんだって、ウケる（大笑い）」

文子「だって実質そうでしょ。まだ受験するつもりなの？」

英子「さあ？」

数子「さあって、英子、超冷たい。同じ大学目指してた仲間でしょ？」

英子「やめてよお、別に仲間じゃないし」

全員「わーはらぐるー」

英子「だってえ」

理子「いや、英子は正直、ざまあみろと思ってんだよ。千尋いなくなってくれて。ね、

ライバル減って」

英子「そこまで思っていないよ」

理子「だって言ってたじゃん、ぶっちゃけ千尋、超ウザイって。いっつもお高く止まってるって」

英子「そんなこと言った？そりやうざかったけどー」

文子「ま、あの事故は運命だったんじゃない。」

英子「そ、ひとり脱落者でたわけだし。ラッキー、てことで」

全員、「きつつう」とか言いながら、笑ってる。

先生「よし、じゃ今から直前講習始めるぞー」

などと先生がやってくる。

やがて、その場所、ひとつの空席にスポットへ。

それは千尋の座るはずの席。

シーン14 病院（スポット）

千尋「・・・脱線した人間に構ってる暇はない・・・か」

● 病院の屋上

ギターの練習をしている満里奈が映し出される。（スポット）奏でるメロ

ディーは、落ち込んでる千尋（スポット）の心情とシンクロする。

千尋の独白「その日、私はなぜだか夢を見た。何度も見た夢。」

どこからかノスタルジックな音楽が聞こえ出す。

千尋の独白「・・・忘れもしない。母が出て行った中学三年生の夏・・・」

○家（回想）

ヒグラシがカナカナと鳴気声が大きくなっていく

(以下、遠くではランダムに豆腐屋のチャルメラの音も)
そんな音ともゆつくりとノスタルジックな照明へ。(回想)
舞台上には、ちゃぶ台。登場する父。

回想の父「お母さん、ご飯、いつごろ・・・」

母はいない。聞こえるのは、蟬の声ばかり

回想の父「お母さん？」

ちゃぶ台に置かれた手紙を拾い上げ、広げてみる
表情が曇る父。

声(千尋)「ただいま！お母さん、見て！」

と、帰ってくる千尋。(制服姿)

外で待ってるユーヤ。一緒の下校のようだ。

千尋「お母さん！ほら！100点取ったよ！見て！」

あちこち探す、が母はいない。

突っ立ってる父を見て

千尋「あれ、お母さんは？」

回想の父「置き手紙を持ったまま）ちよつと出かけるんやと」

千尋「ええー、せつかく喜ばせようと思ったのに。」

回想の父「何や、テストで百点、取ったんか？」

千尋「お父さんなんか見せへんわ！どうせ当たり前やうて言うんやろ！頑張るの当たり前やうて！中卒のくせに何でも当たり前やと思わんといてよ！当たり前前の事なんかこの世にひとつもないで！」

回想の父「ごめんな、中卒で・・・」

千尋「もういいわ、出かけてくる。夕食、ユーヤんちでお呼ばれする。あ、満点取った事、お母さん帰ってきてても内緒にしとってよ、私が見せるで！ね！」

千尋、ユーヤと一緒に退場。

回想の父「・・・」

置き手紙を破り捨てる父。

千尋の独白（録音）「次の日、父は、母が出て行った事について何一つ話してはくれなかった。次の日も、また次の日も。父はそうして昔から何か問題があると、それがあたかも当たり前のように振る舞った。そんな不甲斐ない父に、いつの頃からか母が愛想をつかしたのかもしれない。【どうせ中卒だから】、父は酔っぱらう度にそう自分を卑下した。就職先がずつと見つからなかった父は、人生の色々な節目において、いつも何かを諦めていた。それを当たり前だと割り切って、全てなかったことにしていた。私の百点満点のテスト用紙は、結局、母に見てもらおう事もなく、押し入れの中で眠ったままになった。」

ゆっくりヒグラシの鳴き声が世界を覆い尽くす。

やがて病院の照明へチェンジ。

千尋のN「目を覚ますと、やっぱり白い壁に囲まれていた。ギプスで固定されたままの足を見ているうち、私はいてもたってもいられなくなった。」

千尋、松葉杖を手にとり、歩き出す。

千尋のN「一刻も早くここから出よう。脱線した場所から元のレールに戻ろう。その一心で松葉杖を手にし、リハビリを始めた」

照明クロスチェンジと同時に人々（患者、外来、病院関係者等）が登場。そこは、病院内の廊下へと変わっていく。

別の場所に照明。（※千尋は、鮫島たちの会話の間、スローモーションで歩く）

鮫島女医「オツボネさん」

大坪看護師「大坪なんですけど」

鮫島女医「千尋ちゃん、自分からリハビリ始めとるみたいやね？」

大坪看護師「よっぽどこっから出たいんやないやろうかね」

鮫島女医「ま、ええ事やわ。反発できるってのは気力が残ってる証拠やで。」

大坪看護師「実際、はよ出れるもんですかね？」

鮫島女医「さあ、どうやろね」

鮫島と大坪のいる場所から、再び千尋のいる場所がメインに。

千尋の独白「(松葉杖をつきながら)こんな場所、自力で脱出してみせる。体力つけて。

松葉杖使いこなせるようにして。絶対に、こんな場所……」

左右に移動していた人の往来が無くなり、その向こう側の男子と目が合う千尋、ハツとした表情。

千尋「……(ゆっくりとメガネを外す)」

人々の点数がスッと消え、ガチャガチャしてない視界に。ユーヤと千尋、対面。少し距離がある。

ユーヤ「……やあ」

千尋「……やあ……」

ユーヤ「……やあ」

千尋「……やあ」

遠くの鮫島と大坪。また噂話

鮫島女医「何、あの二人。さつきから「やあ」しか言つとらへんけど。」

大坪看護師「あれ、鮫島先生、ユーヤくんの事、知らないですか。」

鮫島女医「あの子、ユーヤくんって言うの？さすがオツボネさん。歩くワイドショー」

大坪看護師「浅野先生の息子さんですよ、たしか」

鮫島女医「浅野先生って、耳鼻咽喉科の？」

大坪看護師「そう、まあ、頭いい子やったらしいですよ、昔から。」

鮫島女医「そう言われりゃー。なんか医者の子って感じするねえ」

大坪看護師「ほんで千尋ちゃんと秀才カップルやったんやわ」

鮫島女医「え、あの二人付きあつとるの？」

大坪看護師「まあ、今は別れたみたいやけど」

鮫島女医「なるほど。ほんで、あのぎこちなさか」

大坪看護師「ま、ほろ苦い青春って感じやね」

鮫島女医「オツボネさんには無縁やね」

大坪看護師「……ガルル(鮫島に牙を向く)」

鮫島達の照明が消える。(鮫島たち、退場)

シーン15 回想

再び千尋とユーヤのいる場所がクローズアップ。

千尋「えっと……今、何やってんの？」

ユーヤ「あ、今？今ね、満里奈の付き添いさ。」

千尋「満里奈の付き浴い？」

ユーヤ「そうそう。今、耳鼻咽喉科で検査受け取るんやわ。検査つて、ほら、ノドのメ
ンテナンスっていうか。年中歌つとるやろ。んで、満里奈、スイツチ入ったら
手―抜かへんやろ。やから時々ノドの定期検診させとるんやわ。」

千尋「あ、そっか。お父さん、あれだもんね」

奥から看護師と一緒に出て来る満里奈と美咲とトミコ。

耳鼻科の看護師（二川）「まあまあ、いちいち大きな声出してえ。とりあえず結果出る
まで大声出さんように。わかった？」

満里奈「（千尋に気づき）あれ？・・・千尋！（と、大声を出し、千尋に近づく）」

その声にビクつとする千尋とユーヤ。

二川看護師「だから大声出したらあかんって！」

美咲と目が合う千尋とユーヤ。目をそらす。

満里奈「なんで、千尋、ここにおるの！？あ、リハビリ！？松葉杖とか使いこなせるよ
うになったん！？」

ユーヤ「こら、満里奈、声出したあかんって！」

満里奈「なにい、声出したあかんって、一切しゃべるなって事？」

ユーヤ「結局声帯つてのは休ませるしか治す方法ないんやで。こうやってしゃべつとる
間にも声帯は常に使つとるわけやし。だから完全にお口チャック。わかっ
た！？」

満里奈「オッケー！」

ユーヤ「だからしゃべつたらあかんってば！」

口を塞ごうとすると、満里奈、逃げる。追いかけるユーヤ。

ユーヤ「こら、満里奈！」

美咲、トミコ、千尋だけになる。

トミコ「（二人を交互に見て）あ、やべ！」

美咲「何が？」

トミコ「あ、いや、別にやばかないか。はは。なんていうか、えーつと・・・(思い出し
たかのように) あ、本堂の掃除せな。なんまいだー」

トミコも退場。美咲と千尋だけになる。

美咲「何、トミコ、変なの」

千尋「もとから変でしょ」

美咲「はは、そっか・・・勉強、はかどつとる？」

千尋「おかげさまで」

美咲「まさかこの階にチーが降りて来るとは思わへんかったわ。いや、みんなで話しと
つてさあ。試験近いらしいで、今日はチーの病室行くの控えとこかって」

千尋「へえ」

美咲「あ、満里奈なら大丈夫やよ。ただほら、満里奈、特に今回の大会に命かけとるで
さあ。最終的な声のメンテナンスもしとかとさ。」

千尋「そっか。」

美咲「ま、千尋の受験と比べたら、そんな大したあれやないかもしれへんけど、うちら
にとつちや一世一代のイベントやで、全力で頑張らんとさ。」

千尋「・・・」

美咲「あ、頑張るって言葉、あれやね。千尋のおじさんに聞かれたら怒られるね。」

千尋「なんで？」

美咲「ほら、文化祭の時さ、千尋のおじさんに見送ってってもらったやんか。あの時、
うちら絶対頑張るでって言ったらさ、頑張るのは当たり前、て怒られたやろ？」

千尋「あの人、口だけは達者だから」

美咲「けど、なんか残つとるのよね、あの言葉。頑張るのは当たり前で、結果を出さな
意味ないって」

千尋「聞き流していいと思うけど」

美咲「いや、聞き流せーへんよ。私、ほんと何もないでさ。ほら、満里奈は昔から歌う
まいでそつちの道で行きたいって思っとつたやろ。トミコはトミコで、なんだか
んだで将来は実家のお寺つぐって決めとるし。で、チーは、なんか中三ぐらいか
ら急にウサギみたいになったし。」

千尋「うさぎ？」

美咲「そう、私がかめで、チーはウサギ。だってほら、チー、進学校行くって言い出し
たのも急やったやろ。いや、うちの知らん所でずっと準備しとつたんやろうけ
ど、なんか、よいドンでピョンピョンって、もう全然追いつけーへんよ
うになった気がして。だから、あの、だから私だけ何もあらへんなあって。文化
祭終わってバンドも無くなったたら、なーんもなくなってまったなーって。」

千尋「それでまた再結成しよって？」

美咲「今までの人生の中で、一番楽しかった事って何やったんやろうって考えてさ。

そしたらやっぱりみんな音楽しとる時が一番楽しいなって思っ。ほんでちよう

ど私の誕生日近くて、久しぶりに集まったその時に【もう一回バンドやらへん】

って呼びかけたの、そしたら聞いて！二人とも同じ事言おうと思っと思ったんやて、

その時！とりあえず小躍りしたよね！」

千尋「そっか。じゃあ大会、頑張って」

美咲「あ！」

千尋「え？」

美咲「だから頑張るのは当たり前やて。親父さんに怒られるよ、その言葉」

千尋「(頷いてから)・・・じゃそろそろ病室戻るわ。」

と、千尋、松葉杖を使い歩き出す。

美咲「あ、そうや！そーいや、千尋の番号、変わった？」

千尋「え」

美咲「なんか電話しても繋がらへんでさあ」

千尋「ああ」

美咲「番号教えて。(と携帯を取り出し)登録しなすすで」

千尋「・・・持っていないだ。」

美咲「え」

千尋「携帯無くしちゃってさ、それ以来持つてなくて」

美咲「・・・そっか。ほんならまた手紙にしよかな」

と微笑む美咲。千尋、松葉杖で歩き出す。ゆっくりと照明代わっていく。

(美咲、一人スポット。千尋の去っていた方向を見る)

その間に、場面が病室へと戻って行く

やがて、寂しそうな表情を浮かべる美咲、退場。

暗がり。千尋のベッドのみが照明。

浮かび上がる千尋。

千尋の独白「真夜中の静寂。自分のテリトリーが守られるこのしじまに、私はようやく

問題集のページを開く」

メガネをかける。周りで寝ているベッドの上にスーッと浮かび上がる点数。

千尋の独白「メガネをかけると浮かび上がる点数。」

千尋、問題集に何かを書き込む

千尋「答えを書き込み、正解であれば加算される点数。不正解であれば、答えを書き直す。マークシートなら別の番号に塗りつぶす。点数が加算されるまで。何度もやり直す事が出来る。・・・この静寂の中、今更ながら気づいちゃった・・・この能力、ものすごい！本当、今更だけど、気味悪かったから若干避けてたけど、この能力があれば、これから先ケアレスマスも絶対ないし、ましてマークシートなら全問正解確実だし！すごいよ！」

ゆつくりと登場する昔のライバル達。規則正しい動きの生徒たちが織りなす世界

千尋の独白「私は脱線した。だけどまだ戦える。」

そのシステムの中へ入っていく千尋。機械の一部のように。パジャマっぽい病院服から制服姿へ。一瞬の早着替え。

千尋の独白「戦える。戦おう。この能力は外れクジなんかじゃない、神様が与えてくれた一発逆転の能力なんだ。」

制服を着た女子が一斉に退場。

派手だった照明は、再び朝の病院の照明に切り替る、朝を告げる音。

シーン16 病院・大部屋（次の日）

大坪看護師「はい、朝やよー、起きてー」

カーテンをブワーッと開けるナース。

薄暗い部屋に光が差し込まれる。

大坪看護師「あら、千尋ちゃん、起きたった？」

千尋「はい、着替えも終わりました。」

大坪看護師「いや、さつきお姉ちゃんと美咲ちゃんがここ来たった時はまだ寝とったでさ。ほんできつと夜遅くまで勉強しとったんやろうね、なんて話しとった

んやて。どう、調子は？眠ない？」

千尋「全然、問題ないです」

大坪看護師「なんか今日は自信に満ちあふれた顔しとるねえ。ええ点とれそうかね」
千尋「問題ないです。模試会場まで30分もかかんないですよね」

大坪看護師「米山小学校とこの公民館やる？ま、車やったらすぐやわ。おじさんも
う下に車止めて待つとると思うけど。あれ？お姉ちゃんら、どこ行つてま
つたんやる。準備大丈夫？」

千尋「はい」

大坪看護師「あ、そうや、松葉杖。昨日より使いやすくなつとると思うよ、長さ変えと
いたで。」

松葉杖を受け取る千尋。が、何かを探す

大坪看護師「どうしたの？」

千尋「メガネ・・・」

大坪看護師「メガネ？」

千尋「あれ？・・・あれ？」

大坪看護師「何処置いたか覚えとらへんの？」

千尋「(焦ってる) え！？何で！？・・・確かにここに・・・いてて」

大坪看護師「こつちで探すで。ほら、無理したらあかんて！」

千尋「え！どこ！？どこ！？(必死)」

大坪看護師「そんなめちやくちや目ー悪いわけやないんやろ？最悪メガネなくなつて」
千尋「(ぶち切れて) ダメなんです、メガネがないと！」

看護師の忠告も聞かず、必死で探してる千尋

遠くの声(夏子)「千尋」

遠くで夏子の声がして振り向く千尋。夏子と一緒に美咲も登場。

夏子「お、起きた？もう行ける？あれ、何やつとるの？探し物？」

夏子と美咲、一緒に探そうと試みる。

美咲「何？何がないの？」

夏子「メガネかけて探しゃーよ。はい(とメガネを千尋に見せる)」

千尋「・・・(唾然とした表情)」

美咲や看護師は未だ何かを探してる。

夏子「ほら、何ぼーっとしとるの、探しものあるんやろ。これネジが緩んどったで、ほんで今ナースセンターでドライバー借りて直しとったんやわ。直しとったつていうか、全部美咲ちゃんがやってくれたんやけど。な、美咲ちゃん」

美咲「はは。こんな事ぐらいしか出来へんでさあ」

千尋「これを探してたの！(見せられたメガネを素早く奪う)」

夏子「ちょ！何、その取り方！」

千尋「帰ってよ！」

夏子「な、何やね急に」

千尋「帰ってってば！」

大坪看護師「ちよっと千尋ちゃん、落ち着かな」

千尋「出てって言うてるでしょ！出てって！」

美咲、泣きそうになり、ダッシュで去っていく。

大坪看護師たちも美咲に付いて去る。

夏子「・・・何その態度、せっかくメガネ直してくれたんやよ。ありがとの一言ぐらい」

千尋「誰も頼んでないし、オネエも何なの！出てってよ」

夏子「あっそ、わざわざ迎えに来たっただのに。ほんなら試験会場、勝手に自分で行きやーええわ！」

夏子、去ろうとする。

千尋「あ、ちょ、ちょ！」

千尋、思わず止めようと身を起こす。

と足がもつれて倒れ、足を痛める千尋。

千尋「いったああああ！もううう何なの、みんな！」

夏子「(呆れて戻って来る) あんた、アホやないの(と手を貸す) ほら」

千尋「触らないで、アホが移る！もう低レベルな人間ばっか！あああ、もうう吐き気がする！」

起き上がろうとするが、足が痛くて立てない千尋

夏子「(大きな溜め息をつき)・・・東京行って少しは成長したかと思ったけど。わがままなお姫様のままやな」

千尋「(座ったまま) お姉は何も知らないからでしょ! 美咲はね、私からユーヤ横取りして、で、見た、あのバカ面。平気な顔して、あーやって今も逢ってるんだよ!」

夏子「勝手に過去を美化するのやめやーよ。あんたがユーヤ君にフラれただけやろ?」

千尋「・・・え」

夏子「あの二人が付き合ってたのだって、あんたと別れた後やん。」

千尋「・・・誰から聞いたの?」

夏子「田舎舐めんな。情報筒抜けやわ。」

千尋「何なの、ここ」

夏子「だいたいあんた今、彼氏横取りって言ったけどな、ずっと前から美咲ちゃんがユーヤくん好きなの知っとったやる。それ知って横取りしたのあんたやん。ステータスっていうかさ、ユーヤくん、一番頭よかったから。あんた、昔から人を得点でしか見とらへんてかったで」

千尋「何が言いたいのか?」

夏子「ユーヤくんに告白された時、美咲ちゃん、あんたとの友情関係とかすっごい気にして、わざわざ私に相談してきたんやよ。けど、私、言っただわ。別に千尋なんか関係あらへんて。好きなら好きで付き合ったらええって。もう我慢せんでもええって!」

五郎、登場。

五郎「おい、何やこんなところで大声出して。他の患者さんドンびきやぞ」

夏子「(五郎を無視して千尋に) むしろ私、美咲ちゃんに同情するわ。あんたとユーヤくんが一緒におった時、どんな気持ちやったんやろうって。私が美咲ちゃんの立場やったら、絶対あんたぶっ飛ばして、病院送りにしとるて!」

五郎「夏子! ここ病院!」

千尋「何なの、クソオネエ! 死んで! 死んだらいい!」

五郎「おーい! ビョーイーン!」

千尋「何なの、このクソ田舎! だからこんなとこ嫌なんだよ」

夏子「そんな嫌なら、はよ出てきやーよ、勝手に。その代わり全部一人でやり! 仕送りもストップ! 決定!」

千尋「そんなの無理に決まってるでしょ!」

夏子「何甘い事言うてんの、バイトしながら勉強しとる子なんていくらでもおるやろ! あんた、お金かかりすぎなんやわ! 東京の生活費とかどっからお金ひねり出してると思っとんの! あんたのせいでうちの国家は超財政難よ! 過激派か、あんた!

家庭内無差別テロか！」

五郎「お前のボキャブラリーはどっから出てくるんだ。」

夏子「お父さん、千尋に甘過ぎなんやて。こういう人間は、死に際まで自己採点とかするんやで、私の人生、何点やったんやろうって。自分の点数の事しか考えとらんやで。ほんで青春過ぎて年とって、結局周りに誰もおらんくなってようやく気づくんやて。自分が間違つとったって。その時思い知らせたりやあええんやわ」

五郎「夏子、わかったで！落ち着きゃーって」

夏子「(だんだん怒りから泣きが変わっていき) あんたの入院代だつて誰が出しとると思つとるんやて。あんた、お父さんに一回もお礼した事ないやろ。お父さん、可哀想すぎやで。いっつも靴下穴あきで、いっつも賞味期限切れたもの食べて、いっつも下痢して・・・しよぼすぎやろ。お父さん、しよぼくれおっさんなんて、私、悔しくて・・・それでもやで、そんなしよぼくれおっさんがやで、あんたがここに運ばれた時、何て言ったと思う？この子受験生なんで個室にしたつてくれへんやろかって、そう言ったんやで。一番高い部屋でもええんで、結局満室で却下されたけど、お父さん土下座までしたんやで。考えた事あんの、その気持ち？あんなのために毎日、春日神社に合格祈願しとるおっさんの気持ち、考えた事あんのつて！？」

五郎、泣き崩れそうな夏子の肩を抱こうとする

が、夏子、涙をこらえダッシュで去っていく。

気まずい空気が流れる。

五郎「はは、相変わらず瞬間湯沸かし器やろ、夏子も。な。」

千尋「・・・」

五郎「あれじゃ嫁の貰い手もないと思うやろ？けどな、こないだプロポーズされたんやつて。しかも年下の男に。ウケるやろ？」

千尋「・・・」

五郎「・・・悪いな、試験前に。」

千尋「(泣きそう)・・・何で父さんがフォローするの？おかしくない？」

五郎「あいつもお前と一緒にでき、よう勉強出来る子やったで」

千尋「一緒にしないで」

五郎「一緒にやて・・・お母さん出てつてまった時、ちょうど今のお前と同じ受験生やつたで。」

千尋「・・・」

五郎「夏子、それで結局、上京諦めて、こっちで色々世話してくれたで。ほんやで実質、

千尋に夢託したところあると思うのよな。」

千尋「・・・」

五郎「ま、出発しよか。」

五郎、去っていく。千尋のスポットに、照明チェンジ

千尋の独白「私は悔しかった。何も言い返せなかった自分が溜まらなく悔しかった。それでも父は、そんな私を車で模試会場まで運び、私はテストを受けた。マークシートは例によって完璧だった。マークシートの答えを黒く塗りつぶしながら、お姉ちゃんが昔言ってた言葉をなぜか思い出した。」

別の場所にスポット。※回想の夏子

回想の夏子「私はね、未だにわからんのやて。どうしてお母さんが家を出てってまったんやろって。」

千尋の独白「うちの前じゃ夫婦喧嘩すらしなかったお母さん。幸せそうな夫婦演じて、100点満点のような夫婦演じて、母さんは心の奥で何を考えてたんだろう。どんな顔で、「さようなら」の置き手紙を残し、家を出たのだろう。」

回想の夏子「世の中ってさ、知つとる事より知らん事の方が多いやろ。だから、千尋、あんたちゃんと勉強せなあかんよ」

千尋の独白「今、思えば、あの時、私に何かを託したのかもしれない」

回想の夏子「ホント謎やよな。どうして、昔のエジプト人はピラミッドなんて作ったんやろう、とかさ。どうして、いつまでも中東じゃ戦争は終わらへんのやろ、とかさ。どうして、父さんと母さんは・・父さんとお母さんは別々に暮らさなきゃいけなかったんやろう、とかさ。はつきり点数が出て答え合わせしてくれるなら少しは楽かもしれへんんだけど、頭の悪い人にはわからへんよね。だから千尋、あんた、ちゃんと勉強せなあかんよ。」

千尋のスポット消える。

夏子だけのスポットへ。夏子、昔の母のような優しい表情で千尋を見送る。

シーン17 病室

看護師達、テストの点数を見ながら

大坪看護師&看護師2、3、4「ほへー」

などと感心してる

千尋「あの、そんなに感心しないでください」

大坪看護師「感心するやろ、こんな高得点出せるなんておらんよ、この町じゃ看護師全員「ねえ」

千尋「ただの模擬テストですから」

看護師2「模擬テストだったって、本番と同じやろ。」

全員「すごいわあ」

看護師3「やっぱ出来が違うわ。」

大坪看護師「こんな実力あるなら、何処でも受かるんやろ？」

看護師全員「ねえ」

鮫島、登場

鮫島女医「何この病室に固まってんの？あれ、もう仕事あがり？」

看護師3「いえ、違いませう。さあ、仕事再開」

鮫島に睨まれた看護師たち、テストを千尋に返し、去っていく。

鮫島女医も去っていく。

千尋、一人になって 照明、少し千尋に絞られる。

千尋「・・・実力・・・か・・・」

千尋のN「誰もが認める高得点に、正直私は何の感情も抱かなかった。

突然、答案用紙をくちやくちやにして、ポイッと捨てる。

千尋のN「もちろんケアレスマスもなく、マークシートなんか全部正解で、だから小躍りして、ガッツポーズして、これで受験のはずみになる！そう喜べると思ったのに。なんでかな、今回のこの結果は全然嬉しくなかった。」

そこに登場するキム、クシャクシャの答案用紙を拾い上げる

キム「どうか、ありましたか？」

千尋「・・・」

キム「千尋さん困るの時、私力貸します」

千尋「・・・うん」

キム「あ、千尋さんの友達、今、音楽の会場向う聞きました。すごいです。歌、歌う。

楽器する。すごいですね。」

千尋「キム君」

キム「はい、なんでしょう」

千尋「キム君は、何で日本語勉強してるの？」

キム「この国、好きです。勉強も好きです。だから勉強します。」
千尋「そっか」

キム「千尋さんはどうして勉強しますか？」
千尋「・・・どうしてだろう」

キム「学校、テストあります。いつも点数、評価されます。だから苦手です。だけど勉強好きです。」

千尋「・・・」

キム「それから私、今好きな人います。その人の旦那さんになりたいです。だから日本語勉強して、上手くなるしたいです。」

千尋「好きな人、日本の人なんだ？」

キム「はい。好きだからもつと話すたいです。もつと勉強したいです。だから千尋さんにも勉強教えるしてほしいです。」

千尋「・・・」

キム「迷惑の時、言うの御願います」

千尋「迷惑じゃないし、間違っと思ってないと思う。」

キム「え」

千尋「ホントに好きだったら、点数は関係ないんだよね。」

千尋、そう言って、少し微笑む。

キム「優しいですね」

千尋「私が？優しい？」

キム「はい、千尋さん、優しいです」

千尋「・・・」

シーン18 会場(ある一角)

美咲達や他のバンドメンバーが緊張しつつ待機

声(スタッフ)「じゃ次、エントリーナンバー10番の方、用意してくださいーい！」

美咲たちの隣の団体が立ち上がり、奥へ入っていく。

トミコ「わ！わ！いよいよ、次やよ、次！」

美咲「くうううう、緊張するうううう！」

満里奈「けど、地区予選で手こずつとるようじゃダメやよね」

美咲 「つしやああ、東京行き決めるぞおおお！」

周りのバンドたちが美咲を白い目で見ると、
気にして慌てて口を塞ぐ

シーン19 大部屋 (元の場所に戻る照明)

松葉杖をつき、窓の向こうを見ている千尋。

欽次 「おう、模試で高得点マークしたそうやんか。さすがやなあ。」

千尋 「・・・だから？」

欽次 「だからって？その蔑んだ目やめーよ。昔はもつとかわいかったろ。見て！いい点取

れたよ！みたいなさ、そーゆーのなの？」

千尋 「・・・欽ちゃん」

欽次 「・・・お、おう、なんや、その目。」

千尋 「欽ちゃん、昔、私に告白したよね。」

欽次 「何、大昔の話！恐竜時代やぞ、それ」

千尋 「何処が好きだった？」

欽次 「え・・・」

千尋 「私のいいところ、どこ？」

欽次 「え・・・ほら、頭もええし。」

千尋 「うん」

欽次 「うん」

千尋 「そんなけ？」

欽次 「そんなけって・・・頭いいってすごい事やぞ。俺、ミスター中
卒やから」

千尋 「・・・(気を失いかける)」

欽次 「おい、どうした？(と倒れそうな千尋を支える)」

千尋 「(欽次に寄りかかりながら) なんかよくわかんなくなってきた・・・」
欽次 「お、おい・・・」

欽次、倒れて来る千尋を横にさせる。

ドキドキしている欽次、周りを確かめ、唇を近づける。

大坪看護師 「何やってんの？」

欽次、ビクっとして思わず立ち上がる

大坪看護師「今、変な事しようとしたでしょ？」

欽次「し、しとらへんですよ」

大坪看護師「いいや、しとったね。ここ病院やでね！そういう事は一切禁止やから！羨ましいから！」

欽次、逃げる。

大坪看護師「あれ、何で逃げるの！ちよっと！」

シーン20 五郎の家と、美咲たちの場所

(※それぞれスポット)

ひとつの電話に顔を寄せあい話す三人(美咲、トミコ、満里奈)

トミコ「もしもしおじさん、ちー、おる?!」

五郎、別の場所、スポット。

五郎「もしもし、あー、今病院やないんや。千尋はおらんわ」

夏子「お父さん、トイレ流してっば！」

美咲「ちよっとおじさん、聞いて。驚き桃の木栗の木、すごい報告！」

五郎「おい、もしかして！」

夏子「どうしたの!? (電話に駆け寄る)」

美咲「通過！二次審査、通過！東京行き決定やて！」

と受話器越しに大喜びしている三人

五郎「うるせえーて！うるせえけど、おめでと！」

美咲「ちーに伝えといて！一緒に東京行けるって」

トミコ「おじさん、おごっってくれるって前に言っとったよね！よろしくね」

満里奈「ほんならうちら他にも知らせまくるんで！」

三人「ばいばーい!(で、電話を切る)」

五郎「よっしゃ！おじさん、大貧乏！」

で五郎も電話を切る。その場所のスポット落ちる。

ピンポン パンポン (SE)

その音で照明、切り替っていく。

院内放送「浅野先生、浅野先生、至急、耳鼻咽喉科までお越し下さい」

病院の待合室等の雑踏（S E）が聞こえ人々が登場。

シーン21 病院・待合室

急ぎ足で廊下を走るユーヤ。

同じく急ぎ足の耳鼻科の看護師。何か焦ってる様子

耳鼻科の看護師「あ、浅野先生の坊ちゃん、ちよつといいですか？」

ユーヤ「坊ちゃんは止めてほしいんやけど」

耳鼻科の看護師「深刻な顔で」満里奈さんの腫瘍の件なんやけど」

ビクつと反応する千尋。……

ちよつど二人が話をしているところは、

千尋が横になってる待合室のベンチの前だったのだ。

シーン22 五郎の家

（※同時進行で二つの場面がシンクロ。

五郎と三木看護師が電話の会話。とユーヤと耳鼻科看護師の会話）

五郎「（スポットの中）あー、もしもし、そちらの病棟で入院しとる坂上千尋の父やけ

ども、はい、お世話になります。あのねえ、ちよつと娘に知らせたい事があ

ってねえ。」

ユーヤ「（耳鼻科の看護師に）その顔は、あんまよくない知らせじゃ」

五郎「はは。ええ知らせですよー」

耳鼻科の看護師「ええ、実は」

五郎「実は」

ユーヤ「え、再検査!？」

五郎「オーデイション審査の件ですわね!」

耳鼻科の看護師「再検査をユーヤさんから促してもらいたいんやわ。」

三木看護師「え、もしかして最終審査のオーデイションが？」

五郎「受かったんですよ!」

耳鼻科の看護師「辞退させたいんですよ!」

ユーヤ「僕がそう説得するんですか？」

耳鼻科の看護師「あの年頃の子は、うちらが言っても聞かへんと思うで。あの中に坊ち

やんの彼女もおるって聞いたし。」

三木看護師「うわあー、そら、すごいすねえ」

ユーヤ「再検査が必要って事は、最悪の場合」

五郎「ええ、最高の場合、」

耳鼻科の看護師「咽頭癌の可能性もあるでねえ。」

五郎「優勝の可能性もあるでねえ！」

三木看護師、電話ごしに興奮してる。

耳鼻科の看護師「ほつとくと、一生歌えなくなる可能性もあるやろうし、とにかく絶対

安静促してもらえーへんかね。ね、坊ちゃん。」

五郎「千尋に伝えたってもらえるかね。絶対、喜ぶと思うで！」

五郎、電話を切る。スポットが消え、

三木看護師のスポットも同時に消える。

耳鼻科の看護師、ユーヤの前から去る。舞台には、千尋とユーヤだけになる。

ユーヤ、千尋と目が合う。

ユーヤ「・・・聞いたった？」

千尋「まる聞こえだけど」

ユーヤ「まいったなあ。美咲たちには言いにくいなあ。」

千尋「止めさせるの？この大会に命かけてるのに」

ユーヤ「ま、一応医者の子やで。長い人生の事考えたらその選択肢を選ばせた方が」

千尋「長い人生になるかもわかんないでしょ、最悪の場合？」

ユーヤ「・・・」

千尋「私、ずっと無視してきたんだよね、美咲たちの電話。留守電とかも入ってて。この田舎の事もよく知ってた。けど、ずーっと知らないフリしてた。」

※以下、別の場所のスポットに回想の美咲。

回想の美咲「みんな色々言うけどさ、チーは絶対自分の思った道進んだ方がええと思うよ。」

千尋「卒業式の時、美咲があんな風に言ったのも、精一杯の強がりだっただけだった。」

回想の美咲「私、未来と指切りげんまんした事ないでさあ、羨ましいわ、将来が約束さ

れとるって」

千尋「メガネをかけると、私にははつきりとした未来が見えたけど、けど、美咲には輪

郭の未来しかなくて。」

回想の美咲「私、ほんと何の才能もないでさあ。でもね、ちーちゃん、すごい発見したんやて！私、何もないやろ！何もないからこそね、何かある友達の応援しようかなって。ほら、ちーは勉強すごいし、満里奈は歌すごいし。だから

そのサポートできたらええかなって。それが私の楽しみ！どう？」

千尋「そう言って笑った美咲をキモイと思ったんだよね。何でそんな笑顔のままであんなのって。私、裏切ったんだよ。ユーヤを横取りしたし、バンド解散したのだから私が勝手に・勝手にこの町出てったからだし。なのに何で私に対して笑顔で接してくるのって。」

回想の美咲「応援したいんやて、私、空っぽやでさ」

千尋「そんな事言われたら余計にどうしていいかわかんなくて。」

回想の美咲「もしもし、美咲だけど、そっちはどう？うまくやっとなる？」

千尋「東京に行っても、よく電話かかってきたけど」

回想の美咲「今度さ、ユーヤと付き合うかもしれないのやけど・その前に一度、ちゃんとチーと話したくて。留守電聞いたら電話もらってええかな。じゃあね」

千尋「一度も留守電を返した事もなくて・・・」

回想の美咲「もしもし、チー。やっぱさ、バンド、もっかいやってみようと思っとなるやわ、どう思う？」

千尋「もう一度音楽をやり始めた事もわかってた。わかった上でスルーしていた。底辺でもがいてる美咲たちに興味のないフリしてた。けど・・・」

ユーヤ「・・・」

千尋「けど、やっぱ気になるよ、友達だから」

ユーヤ「・・・」

千尋「ユーヤ、お願い、助けてあげて。」

ユーヤ「都合よすぎーへんか、お前」

千尋「!？」

ユーヤ「勝手に自分一人でここ飛び出してさ。自分だけ特別な人間取りで。全然変わってへんな、そーゆーとこ。【助けてあげて】なんてようそんな都合いいこと言えるな」

千尋「・・・そっか。そうだよな。ごめん、自分で何とかする」

千尋、去る。照明切り替る。(ユーヤ、退場)

プルルルル、プルルルル。

スポットライトに千尋の父、五郎

シーン23 五郎の場所(※スポット)と病院

五郎「はい、もしもし、坂上ですが」

千尋「(深刻な表情) もしもしお父さん。あのさ、満里奈たちの事なんだけど」

五郎「あ、もう聞いた!? そうなんやて二次審査通ったって、ほんで次最終審査、東京やってなあ」

千尋「え！？・・・最終審査行けるって決まったの!？」

五郎「あれ、その事やないんかね？ほんなら何の用？」

千尋「あ、いや・・・今そこに美咲たちいないの？」

五郎「今、知り合いのどこ回つとるみたいやよ、そのうちそっちにも立ち寄りやろ。一緒に東京行けるって大喜びしとったでねえ。おめでとうぐらい言ったりやーよ」

千尋「・・・」

声（ユーヤ）「おい！ちょっと待って！」

声のする方を見る、機嫌悪そうにズカズカ歩く美咲達。後から追いかけてくるユーヤとユーヤの父（白衣）

ユーヤの父「別に、一生歌うなんて言つたらへんで。な」

ユーヤ「そうやて。無理せんでも今の時期だけ我慢すりゃあ」

満里奈「今の時期だけ我慢？・・・」

ユーヤ「ちゃんと再度検査して、そこで治療もしっかりして」

満里奈「今しかない人間は、どうしたらええの？」

ユーヤ「これ以上無理して一生声出へんくなったらー」

満里奈「今あかんなら、これからも先、何もあらへんて！」

電話を持ったままの千尋、そのやりとりを見ている

五郎「もしもし、今、満里奈ちゃんの声やないか？近くに來とるんか？」

千尋「・・・」

満里奈達、去ろうとすると、ユーヤ、手を掴む

満里奈「離して！」

五郎「おい、やっぱ満里奈ちゃんらー近くにおるやろ、なんか嫌がってへんか？」

ユーヤの父「落ち着きやーて。ちょっと再検査するだけやで」

ユーヤの父の手を振り払ったのは、割り込んだ美咲

ユーヤ「美咲！」

美咲「ごめん、こちらアホやでさ。「一生」とかそーゆー長いスパンで物事考えれーへののやわ。」

満里奈たち、去ろうとする。と逆方向から看護師たち。（鮫島も）

耳鼻科の看護師「満里奈ちゃん、もう一回だけ再検査受けよ。ね」
満里奈「どいてください！」

満里奈たちが去ろうとするところを再び抑えるユーヤ。
喚く三人。何人も病院関係者（鮫島も）が集まり、小競り合い

五郎「もしもし、千尋。満里奈ちゃん、なんか揉めとるやろ？な」

千尋「・・・」

五郎「もしもし千尋、聞こえとるか？もしもし！」

千尋「あああああああ！」

と急に叫んだかと思うと、いきなり松葉杖を手にとり、やたら滅法振り
回し威嚇する千尋。みな、啞然

鮫島女医「な、何やつとるの、あんた、患者なんやよ！」

鮫島女医の大声にひるむ千尋、看護師たちに抑えられる。

欽次「何するんや！」

そこに乱入する欽次。取り押さえられていた千尋を救い、病院関係者と
対峙。

ユーヤ「何や、欽次。欽次には関係ないて！」

欽次「関係あるわ、俺の千尋が嫌がつとるやろ！」

トミコ「俺の千尋て」

ユーヤ、欽次を無視して、満里奈を連れて行こうとするが

欽次「近づくなつづの！」

ユーヤと欽次の小競り合い。

千尋の松葉杖を手にとり、振り回す欽次。

大坪看護師「こら！危ないで、こっちよこしなさい！」

と、制しようとする病院関係者に対し、
欽次は、さらに松葉杖を振り回す。

千尋「欽ちゃん！」

欽次「はよ逃げえよ！」

千尋「欽ちゃん、ありがとう！」

美咲「ちーも一緒にいこ！」

千尋「え！？」

近くにあつた車椅子を千尋の近くに持つて来て

美咲「早く！」

車椅子に飛び乗る千尋。その車椅子を引き連れ、走る三人。

欽次「千尋、貸しやでな、今度デートの約束な！」

と叫ぶスキをつかれ、取り押さえられる欽次。

欽次「離せ！ツバ飛ばすぞ、ツバ！ぺっぺ！」

取り押さえていた病院関係者の手が緩む。逃げる欽次。追いかける病院
関係者、退場。

シーン24 (移動中)

走る美咲、満里奈、トミコと車イスの千尋。(中央)

動く背景と人々。(※盆の周りと背景)

走る走る走る、ひたすら走る！

やがて、周りの人々が減りだす。

四人は、人気のない場所へ移動したようだ。

走り続けていた四人。あがった息。

明るみのある場所(土手)になる。

疲れ果てて、倒れ込むものもいる。

トミコ「はあ、はあ、脱走成功やね」

千尋「脱走って、少年院じゃないんだから。」

満里奈「はー、ドキドキしたあー」

美咲「大きく息を吸い込み」もうこれで千尋、退院だー！退院おめでとー（空に叫ぶ）
千尋「無理矢理すぎでしょ。治ってないし。」

はは、と笑う美咲。依然、みな息を切らしている。

満里奈「ねえ、ちょっとだけ、ちーに新曲聞いてもらわへん、せっかくやし？」

美咲「あ、それいいね、受験生へのエールって事で！どう、千尋？ま、やだって言われ
ても、もうやっちゃうけどね」

美咲たち、笑う。千尋も呆れつつも受け入れる。満里奈達、少し畏まりつ
つ、配置につき、MCを始める。

満里奈「えー、ギターボーカルの満里奈です」

美咲「ベースの美咲です」

トミコ「ドラムのトミコです。三人あわせて、」

三人「リトルバードです！」

満里奈「えっと、タイトルまだ決まっとらんのやけど、新曲です。聞いてください」

美咲、満里奈、トミコ、目で合図を送り、同じ呼吸で歌い出す。

歌♪

じつとその歌を聞いている千尋

やがて、歌が歌い終わって・・・

満里奈「・・・ってな感じなんだけど・・・」

美咲「うちら、何点ぐらい取れそうかな？」

メガネをかけ直し、改めて三人を見る千尋。

スーッと頭上に浮かぶ点数。

0点。 0点。 0点。 全員、見事に「0」の数字。

三人「？・・・」

千尋「あのさ、はっきり言っていない?」

三人、ごくりとツバを飲み込み、答えを待つ

千尋「・・・100点!」

美咲「嘘やあ!100点は言い過ぎやろ」

千尋「100点!100点満点!」

満里奈「そうやて、うちら入院患者連れ出して病院脱走したんやよ」

トミコ「満里奈は絶対0点やよ、診察も拒否したんやし」

満里奈「なんで、私だけなんよお。うがー」

などとまたじゃれ合う三人。

千尋の独白「100点と思ったから100点。それでいいと思った。メガネの向こうに映る点数とは違う。だけどそれでいいと思った。」

美咲「ねえ、100って英語で何て言うの?」

トミコ「え、ヒヤクはヒヤクって英語やないの!?!」

満里奈「ヒヤクは日本語やないの?」

トミコ「うそお!英語やる!?!」

美咲「やめてよ、アホ丸出しの会話」

千尋「ワンハンドレッド」

三人「え」

千尋「英語だと100はワンハンドレッド」

トミコ「やる、ワンハンドレッドやる!」

美咲「絶対知らんかったくせに!」

トミコたち、またじゃれあう。

空を見上げた美咲たち。

それに釣られて、見上げる千尋。

千尋の独白「笑っている美咲達。その向こうに広がる青い空。(ゆっくり上を見ていく) 久しぶりにちゃんと空を見た。空を見上げたのは何年ぶりだろう。机に向かい、下を向いた生活ばかりの私にとって、その空はとてつもなく大きく感じた。それから私たちは色んな話をした。西の空が赤く染まって行くまでとにかく色んな話をした。」

少し照明が変わる。日が沈みかけ、夕焼けっぽく

満里奈「さて、そろそろこちらは行きますか、一足先にさ」

美咲達、うん、と言って、楽器や鞆を抱えたりする。

美咲「一緒に羽ばたきたいんやわ、チー。」

千尋「あんま無理しないように」

満里奈「無理せんと飛べへんから、こちらは（と急に真剣なまなざし）」

千尋「・・・」

満里奈「とか言って！（と、おちゃらける）」

「なんや、それ、くさつくさやよ、その台詞」

「そうやて、千尋には叶わんで。10メートルのハネ生えとるで」などと
はやし立てて笑う。

千尋も笑う。

千尋の独白「美咲は、久しぶりに私が笑うところを見たと言った。私はそう聞いて、顔が赤くなった。美咲たちは一足先に東京へ旅立ち、私は病院に戻った。病院の先生たちの中には、何て事してくれたんだとカンカンに怒ってる先生や、困ったもんだねえ、と呆れる先生もいた。父は相変わらず土下座をしていた。そして私は、試験前日、ようやく退院を迎える事になった。」

シーン25 病院（また別の日）

入院中の服ではなく、制服姿に戻っている千尋。

※モノローグの間に着替えてる、

入院中の荷物などを持っている父と夏子。

その千尋たちと対面している病院側の人たち。

看護師5「ま、何はともあれ、退院おめでとう」

などと千尋に花束を渡す。拍手をして見送る看護師たち。

クビにギプスの鮫島たちはムスツとしてる。

五郎「この度はホントにご迷惑おかけしました。」

鮫島女医「ホント大迷惑でした。」

大坪看護師「次もしああいう不祥事起こしたら」

鮫島女医「この人お嫁にもらってもらいますから」

大坪看護師「ふつつかものですが。って、ちよつと！」

キム「千尋さん、お元気で。試験、頑張ってください（と手紙を渡す）」

千尋「？」

キム「あ、それ。後で読むしてください。恥ずかしいので」

欽次「あれ、キムさん！なに、俺出し抜いてラブレター！？ちよつとお！」

などつつつかかるが、「そんなじゃないです」と対抗。じゃれあう。

千尋「じゃ、行きます」

荷物を持ち上げる千尋。

欽次「（千尋に）試験終わったらデートの約束したでな！忘れたあかんよ！」

千尋、手をあげる。

ゆつくりとガタンゴトンという電車の音（SE）が高まっていくと、同時に照明が電車内の照明へ。（動く風景）

シーン26 電車の中。

依然、続くガタンゴトンと電車音。長椅子が何個も並べられ、電車の中をイメージしたイスの配置。

何人か乗客が乗っている。

その中に、座席に座っている千尋のみ、スポット。

千尋の独白「風景が動いていく。最初はゆつくりと、そしてだんだんその景色は早く動き出す。田舎のスピードから、都会のスピードへ。スライドする景色とともに私の心もスライドしていった。」

ふと、去り際に渡されたキムの手紙を思い出し、中身を見る

千尋「（手紙を見ながら）うわー。へたくそな字。」

シーン27 回想 別の場所・スポット・手紙の文面。

キム「へたくそな日本語ごめんなさい。けど泣きそうだったので、手紙にしました。千尋

さん、短い間でしたが、色々教えるしてくれてありがとうございました。実は、私、好きな人に告白しました。名前は、美智子さんと言います。千尋さんにどこか似ています。優しく、強くて、カッコいいです。でもフラれました。けちよんけちよんに言われました。ポロカスに言われました。でも私、元気です。千尋さん、言いました。本当に好きなら点数関係ない。だからこれからも頑張ります。点数関係ない。ずっと忘れないです。ありがとうございます。」

その手紙を読みおわると、千尋、泣きそうになる。

声を殺して泣く。電車はトンネルに入る。暗転。

ダダダダダダダダダ、とトンネルの中に電車の音が響く

シーン28 大学・校門

「○●大学受験会場」と書かれた立て看板。その中に、受験生たちは入っていく。その中に入る千尋

声（試験監督）「えー、受験番号順に席に座ってください。」

シーン29 同・教室内

オープニングのように、きちっと配置された机。

生徒たちがすでに座っている。空席がひとつ。それは千尋の席。やって

くる千尋、机に座り、テストの準備をする。プルルル。

五郎から電話がかかってくる千尋。

千尋「もしもし。」

五郎「あれ、千尋出た！？何でや、あれ！？」

千尋「そっちが電話してきたんでしょ！」

五郎「まさか出ると思わなかったでさ。ほんで留守電に入れようと思っと思ったんやけど。あれ、なんやね、まだ試験会場やないんかね？」

千尋「（周りを気にして、少し離れた場所へ）試験会場だよ。何、用件あるなら早くして」

五郎「いや、実はな、満里奈ちゃんのノドの腫瘍の件なんやけど。」

千尋「え、結果出たの！？」

五郎「おう、出た出た」

千尋「で？」

五郎「いや、あれなあ、悪性やないんやと」

千尋「ホントー！？」

五郎「嘘やないて、ユーヤくんが教えてくれたで。ただのポリープやと。炎症あるけど、

摘出すれば大丈夫やとさ」

千尋「よかったー」

五郎「あ、それからもつとすごい事あったんやけど。まだ話しとって大丈夫か？」

千尋「何？（時計を見て）あとちよつとなら」

五郎「ちよつと美咲ちゃんに代わるわ。」

美咲「（興奮気味に）もしも千尋！ハネ生やしとるかね！？」

千尋「美咲？ 超テンション高いんだけど」

美咲「何でこんなテンション高いかわかる！？あのねえ、うちらが受けた最終オーディションあったやろ！」

千尋「え、いいとこまで行ったの」

美咲「ええとこまでやないて。せーの」

美咲・トミコ・満里奈「優勝したんやて！」

千尋「嘘！？（と思わず大声が出て、周りを気にする）」

美咲「嘘やないて！しかも、もうすぐラジオでうちの曲、全国に流れてまうで！もうどーしようかと思つて！どーしたらええ！？ねえ、すごくない！」

電話ごしでキャーキャーうるさい。

美咲「ラジオ聞けへんと思うで脳内ミュージックで聞いといて。後でCD送るで」

千尋「ありがと。あ、じゃあ私も後でさ」

美咲「なにい？」

千尋「後で携帯番号教える」

美咲「・・・笑つて）よろしく」

五郎「（電話代わつて）ま、というわけやで、今うちにやかましいのが勢揃いしてお祝いパーティーやつとるわ」

トミコ「待つとれよ！富士ロックフェス！」

イエーイ！などと電話ごしで聞こえる騒がしい声

五郎「うるせーて！千尋の声聞こえへんやろ！あ、こら、そんなすぐ食つたらあかんで、

その肉高いで！」

五郎が、料理をガツガツ食いまくる美咲たちを阻止。三馬鹿トリオとじゃれあう五郎。

夏子「（電話に割り込んで）もしもし、ま、そーゆーわけで貧乏が奮発しとるで。しっ

かりモトとったって。残るは、あんたの試験だけやで。」

五郎「そうやて、千尋の実力、見せつけたりやーええで！」

三人「よ！点取り少女！」

千尋「・・・実力、か・・・」

五郎「え、何？もしもしなんやって！？もしもし」

千尋「・・・父さん・・・」

五郎「何や、急に蚊のなくような声出して。なんや、さすがの千尋先生も試験前で緊張しとるんかね。」

千尋「・・・頑張る」

五郎「何や、いきなり。」

千尋「ホント私、頑張るから」

五郎「あのなあ、頑張るのは」

千尋「当たり前」

五郎「わかっとるやないか」

千尋「うん」

五郎「お前の実力やったら大丈夫やて。」

千尋「父さん」

五郎「なんやね、いちいち」

千尋「もし・・・私、落ちたらさ」

五郎「アホか！何言つとんのやて！受けてもおらんに落ちた時の事なんか考とつたらあかんで！死ぬ気でやらな！死んでから言わな！」

千尋「・・・」

五郎「ま、とか言っても何が起こるかかわからんのが人生やでね。・・・けど、もうすでに満点やで。」

千尋「え」

五郎「私に言わせりや、千尋も夏子もどっちも百点満点の子やで。」

夏子「何かっこつけとるんや、このおっさん！」

声（トミコ）「きしよいわ！」

五郎「だからうるせて！（気づくと欽次がいる）お前、呼んどらんけど」

欽次を追いかけ、電話の向こうでまた一悶着。

千尋「・・・ありがとう」

五郎「ほんなら、まああんま長い事話とつてもあれやろうで。切るぞ。」

プープープー。

五郎達の照明、消える。

千尋だけの照明になる。

電話を仕舞い、歩き出す千尋。がふと立ち止まり

千尋「……………」

ゆっくりとメガネを外し、見つめている。

試験官「そろそろ始めますよ」

メガネをしまう千尋。上を見上げ、大きく息を吸い込む。一人で気合を入れる。

千尋「よし、やるぞおおおおお！」

試験官「うるさい！」

千尋、思わず顔を赤らめる。謝りながら、教室内へ。ラジオから流れ出す前奏。と、満里奈と美咲のナレ。

美咲「えー、ラジオの前の不特定多数のみなさま、はじめまして。ガールズバンドの、三人「リトルバードです！」

トミコ「えっと、今日聞いてもらいたい曲は、うちの親友のために作った曲です。」
満里奈「その子はホントうちらみたいなバカやなくて、いつも高得点たたき出せる憧れの存在でー」

美咲「そんな彼女がもつともっと高いステージに行ってほしいなと思って作りました。」
三人「聞いてください。ワンハンドレッドライフ！」

流れ出すラジオからの音楽。

試験会場で試験を受けている千尋。

遠くの空を見つめる。

(おしまい)